

項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		Zapier
0	ホームページ		<a href="https://zapier.com/">https://zapier.com/</a>
1	概要		Zapierは、Gmail、Slack、MailChimpなどの好きなアプリと1,000以上のアプリを接続するオンライン自動化ツールです。2つ以上のアプリを接続して、開発者がコーディングやインテグレーションを構築することなく繰り返しタスクを自動化することができます。Webアプリケーション間の情報を自動的に移動し、最も重要な作業に集中することができます。誰でも簡単に数回クリックするだけで、独自のアプリ
	脚注		価格 ( <a href="https://zapier.com/pricing/">https://zapier.com/pricing/</a> )
	特徴		処理の単位を <b>Zap</b> と呼ぶ。 <b>トリガーとアクション</b> があり、トリガーは「Gmailに新しいメールが来た時」とか、「Slackで特定条件のメッセージが来た時」などの処理の開始になる。アクションは「Slackの#generalにポストする」とか、「GMailにつかってメールする」とか処理の終了になる。Zapの中にあるActionが実際に動作した件数を <b>タスク</b> と呼ぶ。タスクが契約上限を超えると、それ以降Zapは動作しなくなり、For Teamsでは従量課金の対象となる。IFTTTに較べて、利用できる業務アプリの数（1,100個、2018/3/2時点）が多く、フィルタ機能などを使った複雑なワークフローを定義できることが特徴である
	管理画面	○	ユーザ管理画面
	レスポンスタイム	△	実行完了までの時間はコミットされていない 基本15分間隔のポーリング方式だが、ビジネス用途（有料）では5分間隔に。
	個人向け	○	個人の仕事を効率化できるが、会社で導入し、チームで利用することも可能。
	サービス事業者向け	○	なし
	複数の処理の実行	○	有料プランのみ
2	連携方式		
	クラウド間連携	○	APIが提供されていれば接続でき、連携可能（業務系アプリ連携のみ）
	アプリ/クラウド連携	○	APIが提供されていれば接続でき、連携可能（業務系アプリ連携のみ）
	ローカル/クラウド連携	×	ローカルは対象外
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	×	IoT管理機能なし（2018/3/2時点）
	IoT製品の開発が難しい	×	IoT製品の開発そのものは対象外（2018/3/2時点）
	異なるメーカー間の連携ができない	×	IoT連携機能なし（2018/3/2時点）
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスクが増加する	×	IoT連携機能なし（2018/3/2時点）
	IoT由来の脅威が発生する	×	IoT連携機能なし（2018/3/2時点）
	世代管理問題が発生する	×	IoT連携機能なし（2018/3/2時点）
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	×	
	Echonet-Lite	×	
	Amzon Echo (Alexa)	×	
	Google Home	×	

項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		Clova Paltform（正式名称未発表）
0	ホームページ		<a href="https://clova.line.me/">https://clova.line.me/</a>
1	概要		ClovaJ(クローバ)は、LINEが開発したAIアシスタント。あなたの生活をより便利にする機能（スキル）で、毎日の生活をサポートします。（“スキル”は、Amazon Echoでは“Applet”と呼ばれてい
	脚注		<a href="https://clova.line.me/clova-ai/">https://clova.line.me/clova-ai/</a>
	特徴		Clovaプラットフォームを利用するだけで52種類のサービスやIoTデバイスとリンクできます。（2018年2月22日現在）新たに作成したサービスを一般公開し、多くの人に利用してもらう事ができます。LINE関連サービスは、API仕様が公開されていなくても連携可能。
	管理画面	△	ユーザ向け。Clova（iOS/Android）アプリで設定、管理を行う。
	レスポンスタイム	－	情報なし
	個人向け	○	Clovaアプリで対応
	サービス事業者向け	×	開発者向けに、外部とのインターフェイスを受け持つCIC（Clova Interface Connect）、CEK（Clova Extension Kit）を、2018年中に、日本語と韓国語で提供予定。CICにはClovaサービスに接続するためのAPIとSDKが、そしてCEKにはClovaから外部のサービスを実行するためのAPI
	複数の処理の実行	－	情報なし
2	連携方式		
	クラウド間連携	△	既存連携のみ（API開示されていないLINEのサービスも連携可能）
	アプリ/クラウド連携	△	既存連携のみ（API開示されていないLINEのサービスも連携可能）
	ローカル/クラウド連携	－	情報なし
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	△	Clovaアプリ（iOS/Android）
	IoT製品の開発が難しい	－	情報なし
	異なるメーカー間の連携ができない	－	情報なし
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスク増加対応	×	自己責任
	IoT由来の脅威が発生する	×	自己責任
	世代管理問題が発生する	×	自己責任
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	個別認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	×	
	Echonet-Lite	×	
	Amzon Echo（Alexa）	×	
	Google Home	×	
	LINE Clova	○	有（ <a href="https://clova.line.me/">https://clova.line.me/</a> ）
	iRemocon	×	
	IFTTT	○	有（ <a href="https://ifttt.com/clova">https://ifttt.com/clova</a> ）

項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		myThings
0	ホームページ		<a href="https://mythings.yahoo.co.jp/">https://mythings.yahoo.co.jp/</a> <a href="https://mythings-developers.yahoo.co.jp/">https://mythings-developers.yahoo.co.jp/</a>
1	概要		myThingsは様々なウェブサービス・IoTプロダクトを繋げるIoT時代のサービスプラットフォームです。myThings DevelopersはmyThingsプラットフォームを活用し、独自のサービスを生み出すことのできるツールです。あなたのプロダクトと、様々なサービス（チャンネル）を組み合わせることで新しい価値と体験を提供することができますようになります。
	脚注		<a href="https://linotice.tumblr.com/post/156706326279/20170202">https://linotice.tumblr.com/post/156706326279/20170202</a>
	特徴		様々なサービスのAPIの仕様の把握、利用申請が不要です。myThingsプラットフォームを利用するだけで52種類のサービスやIoTデバイスとリンクできます。（2018年2月22日現在）新たに作成したサービスを一般公開し、多くの人に利用してもらう事ができます。 Yahoo! Japan提供サービスは、API仕様が公開されていなくても連携可能。（地震情報等）位置情報チャンネルが追加され Geofence機能が利用可能
	管理画面	○	ユーザ、開発者にそれぞれマイページを用意
	レスポンスタイム	△	実行完了までの時間はコミットされていない 基本15分間隔のポーリング方式 即時処理が必要な時は、myThings Developersのカスタムトリガーを利用する
	個人向け	○	myThingsアプリで対応 myThings Developersは、個人開発者も利用可能
	サービス事業者向け	○	myThings Developersで、企業の自社サービスと連携可能 myThings Developersで、処理が実行されたかログ取得可能
	複数の処理の実行	○	myThings Developersで、複数処理指定可能
2	連携方式		
	クラウド間連携	○	API連携可能（Yahoo! Japanのサービスは、API開示されていないが連携可能）
	アプリ/クラウド連携	△	myThingsアプリのみ連携可能
	ローカル/クラウド連携	×	ローカルは対象外
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	○	myThingsアプリ（iOS/Android）、myThings Developers（ブラウザ）アプリを利用
	IoT製品の開発が難しい	×	対象外（IoT製品後のサービス）
	異なるメーカー間の連携ができない	○	連携可能（条件：APIが提供されている）
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスク増加対応	○	サービス連携で指定できるチャンネルは、検証済みの限定されたものだけ
	IoT由来の脅威が発生する	×	自己責任
	世代管理問題が発生する	×	自己責任
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	個別認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	×	
	Echonet-Lite	×	
	Amzon Echo (Alexa)	×	
	Google Home (Assistant)	×	
	LINE Clova	×	
	iRemocon	○	有( <a href="https://mythings.yahoo.co.jp/">https://mythings.yahoo.co.jp/</a> )

項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		IFTTT
0	ホームページ		<a href="https://ifttt.com/">https://ifttt.com/</a>
1	概要		IFTTT (This then that) というシンプルなコンセプトで、アプリとアプリをAPI接続し、実行する手順を定義するクラウド連携サービス。接続手順をApplet (旧レシピ) として保存し、共有することができる (*1)。Applet (旧レシピ) の「this」の部分は「Facebookで写真をタグ付けした時」「Foursquareでチェックした時」といった「きっかけ」になり、「that」の部分は「テキストメッセージの送信」「Facebookでステータスメッセージを作成」といった「行動」になる。ユーザーが使用するサービスで有効にする「きっかけ」と「行動」の組み合わせがApplet (旧レシピ) である。Twitter、Foursquare、Flickr、Boxといった61ものサービスに対応した「きっかけ」と「行動」を提供している (*5)(*6)。2012年6月、ベルキンのBelkin WeMoを使いApplet (旧レシピ) で現実の世界とやり取りできるようになった(*7)。またYahoo! Pipesといった他のサービスと組み合わせることで数あるサービスからのコンテンツを容易に閲覧することができ、独自のシステムを構築することができる (*1)Quora Community (2012年1月23日)。"IFTTT: Who is the team behind ifttt.com?". 2012年8月8日閲覧。 (*2)Linden Tibbets (2010年12月14日)。"ifttt the beginning...". 2012年11月13日閲覧。 (*3>About IFTTT (*4)Pash, Adam (2012年1月4日)。"How to Supercharge All Your Favorite Webapps with ifttt". Lifehacker. 2011年9月21日閲覧。 (*5) <a href="https://ifttt.com/channels">https://ifttt.com/channels</a> (*6)Williams, Alex (2012年7月24日)。"IFTTT Adds Box And Plans New Channel Platform Intended To Connect Business Apps". Techcrunch. 2012年7月25日閲覧。 (*7)Panzarino, Matthew (2012年6月20日)。"Task automation tool IFTTT gets IFTTT(IFT)とは、Applet (旧レシピ) と呼ばれる個人作成もしくは公開されているプロフィールを使って数あるWebサービス (Facebook、Evernote、Weather、Dropboxなど) 同士で連携することができるWebサービスである。最近では、GoogleAssistantやamazon alexaなどのAIスピーカー (スマートスピーカー) との連携が進んでいる。[出典 : wikipedia]
	脚注		
	特徴		
	管理画面	○	ユーザ管理画面
	レスポンスタイム	△	実行完了までの時間はコミットされていない 基本15分間隔のポーリング方式 即時処理が必要な時は、Realtime APIを利用する
	個人向け	○	DIY文化の北米が主たる市場
	サービス事業者向け	○	Partner (パートナー) は、個人が利用できるAppletを開発し、公開可能
	複数の処理の実行	○	Maker (メーカー) は、マルチアクション可能 ( <a href="https://platform.ifttt.com/maker">https://platform.ifttt.com/maker</a> )
2	連携方式		
	クラウド間連携	○	連携可能 (条件 : APIが提供されている)
	アプリ/クラウド連携	○	連携可能 (条件 : APIが提供されている)
	ローカル/クラウド連携	×	対象外
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	○	必要 (IFTTTを使うことで、サービス間連携が可能)
	IoT製品の開発が難しい	×	対象外 (IoT製品後のサービス)
	異なるメーカー間の連携ができない	○	連携可能 (条件 : APIが提供されている)
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスク増加対応	○	IFTTTが審査したものしか公開できないようになり、一定の歯止めは可能。
	発生するIoT由来の脅威への対応	×	対象外 (自己責任)
	発生する世代管理問題への対応	×	対象外 (自己責任)
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	○	有 ( <a href="https://ifttt.com/zwave">https://ifttt.com/zwave</a> )
	Echonet-Lite	×	無
	Amzon Echo (Alexa)	○	有 ( <a href="https://ifttt.com/amazon_alexa">https://ifttt.com/amazon_alexa</a> )
	Google Home (Assistant)	○	有 ( <a href="https://ifttt.com/google_assistant">https://ifttt.com/google_assistant</a> )

項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		東京大学生産技術研究所 相接WebAPI
0	ホームページ		<a href="https://r-edge.org/">https://r-edge.org/</a>
1	概要		異なるIoTシステムを相互接続することができる。インターネットに繋がる国産の家電機器、国産、外国製の住宅設備機器、ハイエンドなシステム商品、廉価な海外製家電機器など、多岐にわたる機器が接続対象。これらが一つの通信プロトコルでカバーされることは難しいと考えられるが、本WebAPIを介して相互接続が可能となる。アプリケーション製作者は、特別な通信プロトコルに習熟しなくとも、リアル世界のモノを動作させることができる。[出典：生活用のIoTがわかる本]
	脚注		生活用のIoTがわかる本：東京大学 野城教授、馬場
	特徴		IoT機器ベンダーとの責任分界点がCloud DriverあるいはThing Driverであるため、機器の操作やデータのどの部分を公開範囲とするかということについて自由度が高く、かつIoT機器ベンダーの意向を取り入れやすい。また、ライフサイクルが異なっている機器・サービス・技術の相互接続をする場合でも、それぞれのライフサイクルの事情に合わせた維持を行うことが可能である。[出典：生活用のIoTがわかる本]
	管理画面	○	ユーザ管理画面
	レスポンスタイム	△	実行されるまでの時間はコミットされていない
	個人向け	○	DIY向けの連携が可能
	サービス事業者向け	○	Deviceの一部機能のみをサービス業者に提供し、連携させることが可能
	複数の処理の実行	○	複数処理も記述すれば実現可能
2	連携方式		
	クラウド間連携	○	連携可能（Cloud DriverまたはAPIが提供されている）
	アプリ/クラウド連携	○	連携可能（条件：APIが提供されている）
	ローカル/クラウド連携	○	連携可能（Thing Driver、Cloud DriverまたはAPIが提供されている）
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	○	必要（東大生産研WebAPIを使うことで、サービス間連携が可能）
	IoT製品の開発が難しい	○	ローカル/クラウド連携機能を利用すれば、クラウドの運用をせずにIoT製品を開発できる
	異なるメーカー間の連携ができない	○	連携可能（条件：Cloud Driver, Thing Driver, APIが提供されている）
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスク増加対応	○	認定ルール、およびMDMを適用することにより、セキュリティリスクに対応可能
	IoT由来の脅威が発生する	○	関連サービスを適用することにより、IoT由来の脅威への対応可能
	世代管理問題が発生する	○	MDMを適用することにより、世代管理問題に対応可能
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	△	無（未開発）、IFTTT経由で接続可能
	Echonet-Lite	△	有（Echonet-Liteドライバー作成済）、東大コマハウス内の機器のみ対応
	Amzon Echo (Alexa)	○	有（Amazon Alexaドライバー作成済）、Amazon Echoで接続できるものは接続可能
	Google Home (Assistant)	○	有（Google Assistantドライバー作成済）、Google Homeで接続できるものは接続可能
	IFTTT	○	有（IFTTTドライバー作成済）、IFTTTに接続できるものは接続可能
	iRemocon	○	有（iRemoconドライバー作成済）、赤外線に接続できるものは接続可能
	Belkin WeMo	○	有（Beikin WeMoドライバー作成済）、IFTTT経由でも接続可能
	Lutron	○	有（Lutronドライバー作成済）、IFTTT経由でも接続可能
	ロボホン（RoBoHon）	○	有（RoBoHonドライバー作成済）、アプリ以外にクラウドを使った機能拡張可能

項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		Amazon Echo ( Amazon Alexa )
0	ホームページ		<a href="https://developer.amazon.com/ja/alexa">https://developer.amazon.com/ja/alexa</a>
1	概要		Alexaは、Amazon Echo、Echo Dotをはじめとする数多くのデバイスで中枢的な働きをするAmazonの音声サービスです。Alexaが提供する機能やスキルを利用した製品を使用することによって、ユーザーは、よりパーソナライズされた操作性を実現することが可能になりました。世界では3万以上、日本では600以上のスキル（2018年3月末時点）が開発されており、スキルの数は日々増え続けています。設計者や開発者、企業は、Alexa Skills Kit (ASK) を使って、魅力的なスキルを開発し、数多くのユーザーにアピールすることができます。ASKとは、皆様が簡単に、そして短時間でAlexaにスキルを追加できるよう、セルフサービスの一連のAPI、ツール、ドキュメント、コードサンプルをまとめたものです。ASKを使えば、Amazonが長年培ってきた音声設計技術分野のノウハウと先駆
	脚注		<a href="https://developer.amazon.com/ja/alexa-skills-kit">https://developer.amazon.com/ja/alexa-skills-kit</a>
	特徴		Alexaは、Amazon Echoや、Alexaが使えるデバイスの中核となる音声サービスです。Alexaが使えるデバイスの操作には、普段から無意識に使っている「声」という直感的な方法を使います。Alexaの大きな特徴として、サードパーティや個人の開発者による独自拡張があります。拡張の仕組みは大きくわけて2種類があり、Alexaで使える独自機能の追加を「Alexaスキル」、独自デバイスによるAlexa連携を「Alexa Voice Service (AVS)」と呼んでいます。
	管理画面	○	ユーザ管理画面
	レスポンスタイム	△	実行されるまでの時間はコミットされていない
	個人向け	○	DIY向けの連携が可能
	サービス事業者向け	○	サードパーティ製のスキルを開発し、提供可能
	複数の処理の実行	○	複数処理も記述すれば実現可能
2	連携方式		
	クラウド間連携	○	連携可能（条件：APIが提供されている）
	アプリ/クラウド連携	○	連携可能（条件：APIが提供されている）
	ローカル/クラウド連携	○	連携可能（Amazon Echo Plusのみ、ZigBee対応スマートホーム・ハブ機能で実現可能）
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	○	必要（APIが提供されていれば、サービス間連携が可能）
	IoT製品の開発が難しい	○	対象外（IoT製品後のサービス）
	異なるメーカー間の連携ができない	○	連携可能（条件：APIが提供されている）
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスク増加対応	○	Amazonが審査したもののしか公開できないため、一定の歯止めは可能。Google Homeと同様に音声の履歴を参照できる画面があり、音声の再生が可能。 ( <a href="https://alexa.amazon.com/spa/index.html">https://alexa.amazon.com/spa/index.html</a> )
	IoT由来の脅威が発生する	○	対象外（自己責任）
	世代管理問題が発生する	○	対象外（自己責任）
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	△	無（ <a href="http://www.z-wave.com/blog/5-ways-z-wave-works-with-amazon-echo">http://www.z-wave.com/blog/5-ways-z-wave-works-with-amazon-echo</a> ）
	Echonet-Lite	×	無（現時点で、未対応）
	Amazon Echo (Alexa)	○	有（デフォルト）
	Google Home (Assistant)	×	無（現時点で、未対応）
	IFTTT	○	有（ <a href="https://ifttt.com/amazon_alexa">https://ifttt.com/amazon_alexa</a> ） 、IFTTTが対応
	iRemocon	○	有（ <a href="https://www.amazon.co.jp/Glamo-Inc-iRemocon-Smart-Skill/dp/B075F5Z8JW">https://www.amazon.co.jp/Glamo-Inc-iRemocon-Smart-Skill/dp/B075F5Z8JW</a> ） 、iRemoconが対応
	Belkin WeMo	○	有（ <a href="http://www.belkin.com/us/support-article?articleNum=157351">http://www.belkin.com/us/support-article?articleNum=157351</a> ） 、Belkin WeMoが対応
	Lutron	○	有（ <a href="http://www.casetawireless.com/pages/alexa.aspx">http://www.casetawireless.com/pages/alexa.aspx</a> ） 、Lutronが対応
	LINE	△	無（Lambdaで直接作成可能） 、IFTTTでも接続可能



項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		Google Home ( Google Assistant )
0	ホームページ		(プロダクト) <a href="https://store.google.com/product/google_home">https://store.google.com/product/google_home</a> (開発者向け) <a href="https://developers.google.com/actions/">https://developers.google.com/actions/</a> (サポートページ) <a href="https://support.google.com/googlehome">https://support.google.com/googlehome</a>
1	概要		グーグルホームはユーザーが音声コマンドを喋ることで搭載されている「Googleアシスタント」を通じてサービスを起動させる事ができる。グーグル社製とサードパーティー製の両方の多数のサービスが統合されており、ユーザーが音楽を聴いたり、ビデオや写真を見たり、声で最新ニュースを受け取ることが出来る。グーグルホームはホームオートメーション機能を備えており、ユーザーのボイスコマンドでスマートホーム家電を操作することが出来る。複数の部屋に置かれたグーグルホームの音楽の同期再生が可能であり、2017年4月のアップデートで最大6人のユーザーの声を識別可能な複数ユーザーサポート機能が追加された[1]。
	脚注		[1]なおこの機能はバーガーキングによる『OK Google 「ワッパーって何？」への対策を兼ねている。米バーガーキングの「Ok Google」広告、カンヌライオンズDirect部門でグランプリを獲得 スラド(2017年06月24日)
	特徴		グーグル製とサードパーティー製の両方の様々なサービスをサポートし、グーグルホームに統合されており、ボイスコマンドでそれらのサービスを動作させることができる。サポートデバイスの「Google Play Music」「Spotify」「iHeartRadio for audio」「ネットフリックス」「YouTube」「グーグルフォト」「グーグルカレンダー」「グーグルキーボード」などをサポートしているほか、「CNN」、「CNBC」、「ウォールストリートジャーナル」のニュースも受信できる。新サービスは継続的に統合されている。AIアシスタントの「グーグルアシスタント」はグーグルホームの中心かつ唯一のアシスタントとして含まれている。類似サービスの「Google Now」と異なり、グーグルアシスタントはユーザーとの双方向の会話が
	管理画面	○	ユーザ管理画面
	レスポンスタイム	△	実行されるまでの時間はコミットされていない
	個人向け	○	DIY向けの連携が可能
	サービス事業者向け	○	サードパーティー製のアクションを開発し、提供可能( <a href="https://developers.google.com/actions/community/">https://developers.google.com/actions/community/</a> )
	複数の処理の実行	○	複数処理も記述すれば実現可能
2	連携方式		
	クラウド間連携	○	連携可能 (条件: APIが提供されている)
	アプリ/クラウド連携	○	連携可能 (条件: APIが提供されている)
	ローカル/クラウド連携	○	対象外
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	○	必要 (APIが提供されていれば、サービス間連携が可能)
	IoT製品の開発が難しい	○	対象外 (IoT製品後のサービス)
	異なるメーカー間の連携ができない	○	連携可能 (条件: APIが提供されている)
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスク増加対応	○	Googleが審査したものしか公開できないため、一定の歯止めは可能。Google Homeのデータは、サーバへの送信時と保存時に暗号化(デフォルト)検索履歴や位置情報の履歴、音声コマンドなど、アプリから収集したデータはすべて、Googleアカウントに紐付けられる。Google Home や Google アシスタントとの会話履歴は、ユーザーが削除するまで保持 (管理は「マイアクティビティ
	IoT由来の脅威が発生する	○	対象外 (自己責任)
	世代管理問題が発生する	○	対象外 (自己責任)
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	△	有 ( <a href="http://www.z-wave.com/">http://www.z-wave.com/</a> )
	Echonet-Lite	×	無 (現時点で、未対応)
	Amzon Echo (Alexa)	×	無 (現時点で、未対応)
	Google Home (Assistant)	○	有 (デフォルト)
	IFTTT	○	有 ( <a href="https://ifttt.com/google_assistant">https://ifttt.com/google_assistant</a> )、IFTTTが対応
	eRemote	○	有 ( <a href="http://linkjapan.co.jp/googlehome/">http://linkjapan.co.jp/googlehome/</a> )、eRemoteが対応
	Belkin WeMo	○	有 ( <a href="http://www.belkin.com/us/resource-center/wemo/works-with-google-home/">http://www.belkin.com/us/resource-center/wemo/works-with-google-home/</a> )、Belkin WeMoが対応
	Lutron	○	有 ( <a href="http://www.casetawireless.com/pages/googleassistant.aspx">http://www.casetawireless.com/pages/googleassistant.aspx</a> )、Lutronが対応
	LINE	○	有 (Google Homeの「Integrations」で、直接、LINE連携が可能)、IFTTT経由でも接続可能

項番	調査項目	有無	詳細
0	クラウド連携サービス		au HOME
0	ホームページ		<a href="https://www.au.com/auhome/">https://www.au.com/auhome/</a>
1	概要		「au HOME」は、「いつもの暮らし、ちょっと便利に。」をコンセプトに「auひかり」をご利用のお客さま向けに、基本利用料(月額)と、「au HOMEデバイス」をご購入いただくことで、お気軽にお楽しみいただけるIoTサービス。 センサーやネットワークカメラなどの「au HOMEデバイス」を活用し、外出先でも「au HOMEアプリ」から、ドアの鍵・窓の開閉状況を確認できる「あんしん」、自宅にいる家族・ペットと外出先からコミュニケーションできる「たのしさ」、 「au HOMEアプリ」で一元的に管理できる「べんり」を提供。「1」
	脚注		[1]、「au HOME」の提供開始について(ニュースリリース) <a href="http://news.kddi.com/kddi/corporate/newsrelease/2017/05/30/besshi2478.html">http://news.kddi.com/kddi/corporate/newsrelease/2017/05/30/besshi2478.html</a>
	特徴		au HOME アプリによって、au HOME デバイスをまとめて管理でき、ドアの開閉等、状態に変化があった時にお客さまへ通知を行う。 通知モードをONにすると、状態変化があった時には通知が届き、すぐに状態が確認できる。au HOMEご契約者さまのご家族もau HOME アプリをご利用可能。
	管理画面	○	au HOME アプリ ユーザ管理画面
	レスポンスタイム	○	光サービス加入者向けクローズドNW (実行されるまでの時間はコミットされていない) (無線通信アダプタ等を使うことで光サービス加入者以外でも利用可能)
	個人向け	○	光サービス加入者向けIoTサービス (無線通信アダプタ等を使うことで光サービス加入者以外でも利用可能)
	サービス事業者向け	○	Partner (パートナー) 様は、with HOMEサービスにて、連携機能を提供可能
	複数の処理の実行	×	現状、マルチアクション機能は未提供。 (au HOMEアプリではスマートフォンの位置情報を条件とした家電ON/OFF機能あり)
2	連携方式		
	クラウド間連携	×	現状、外部にAPIは提供されていない。
	アプリ/クラウド連携	×	現状、外部にAPIは提供されていない。
	ローカル/クラウド連携	×	現状、外部にAPIは提供されていない。
4	顕在化した課題		解決策
	IoT機器毎に管理アプリが必要	○	au HOME アプリを使うことで、サービス毎の制御が可能になり、一元管理可能
	IoT製品の開発が難しい	○	独自IoT製品を提供。
	異なるメーカー間の連携ができない	×	現状、外部にAPIは提供されていない。
5	潜在的な課題		解決策
	セキュリティリスク増加対応	○	安心・安全なクローズドサービス
	IoT由来の脅威が発生する	○	安心・安全なクローズドサービス
	世代管理問題が発生する	○	クローズドなサービスのため制御可能
6	プライバシー問題		
	ユーザによる許諾	○	認証
7	団体標準		対応有無
	Z-wave	○	
	Echonet-Lite	×	
	Amzon Echo (Alexa)	×	
	Google Home	○	



